『部屋はなかった』（ルカの福音書 2 章 1-7 節）2022.12.11.

＜はじめに＞今のクリスマスの華やかさと賑わいと比べると、イエス誕生の物語は飾り気はありません。それどころか「宿屋には彼らのいる場所がなかった」の記述には、驚きを禁じ得ません。喜びや幸せとは対極の絵がクリスマスの原点でした。

Ⅰ　みすぼらしい救い主(6-7)

①救い主の誕生

家畜と干し草のにおいの漂う中で、両親と家畜たちが見守る中、救い主は誕生しました。ファンファーレ、祝砲、歓喜の群衆などは見られません。旅先での出産となり、宿屋にも場所を見出せず、飼葉桶が最初の寝床としてあてがわれ、そこに寝かされました。

②受け身の救い主

世が救い主に期待するのは権威と力強さですが、みどりごの姿はその対極です。か弱く、自ら何もできず、世話をされる側で、彼には選ぶことすらできません。取り囲む環境・境遇の中で、生まれたばかりのいのちは静かに息づいています。

③人間と同じように

神が人となって世に現れたのが、このみどりごの救い主です。ヨハネ 1:14、ピリピ 2:6-8 に描かれたように、へりくだって人間と同じようになられました。それは試みられている者、自らの無力さと罪深さに悩む者を助け、そこから救い出すためです(ヘブル 2:17-18)。

Ⅱ　振り回される両親(4-7)

①突然の帰省(4-5)

ヨセフとマリアはガリラヤの町ナザレに住む婚約期間中の二人でした。結婚と出産準備を進める中、住民登録の勅令によって故郷ベツレヘムへの旅を強いられます。身重の妻を伴っての 150 ㎞程の山坂の旅程に、どれほど時間かかり、困難があったことでしょうか。

②旅先での出産(6-7)

「ところが…」は彼らの予定外を暗示します。滞在が伸びて、マリアはそこで出産することになりました。慣れない旅先で助け手も乏しい中、家畜小屋の片隅に初産の場を見出します。宿屋は混雑ゆえか、費用がかさむからか、彼らの居場所とはなりませんでした。

③布にくるんで(7)

わが子の誕生をこのような形で迎えたことに、両親はどう思ったでしょう。しかもこの子は神が約束された救い主です。無事に生まれたみどりごを、両親はなし得る限りをもって包み寝かせます。制約や問題課題に囲まれる中で、私たちは救い主をどう迎えましょうか。

Ⅲ　取り囲む世界（1-4）

①全世界を動かす皇帝（1-3）

税徴収の基礎を得るために、皇帝アウグストゥスは全領域に住民登録の勅令を出します。それがヨセフ一家に影響を及ぼし、救い主の誕生と関わるとは、全く思い描いていません。また、この時に勅令が出なければ、マリアはナザレで出産を迎えていたと思われます。

②強いられてベツレヘムへ（4）

両親は生まれる子が救い主だと聞いていました（ルカ 1:31-33、マタイ 1:21）が、救い主がベツレヘムに生まれる預言（マタイ 2:5）は知らなかったのでしょうか。彼らがベツレヘムに赴いたのは住民登録があったからです。身重の妻を慮り、ためらっていたのでしょうか。

③見えざる神の御手（ヘブル 11:27）

これら一連の出来事はすべて偶然でしょうか。皇帝を使って全世界を動かすことで、救い主誕生の預言は成就されたのは、全てを治められる神と見ることはできないでしょうか。すべてが思い通りにうまく行かなければ、神を認められないでしょうか(ヘブル 11:39-40)。

＜おわりに＞ クリスマスの物語には、私たちの生活と似ていて、思うに任せられないことが多々見られます。しかし、その只中に救い主が来られ、背後に神が力強く働いておられます。それを見抜き、その真実さと力強さを信頼して、自らをその御手に委ねるのが信仰です。(H.M.)